

# 通時的变化を背景とした接続助詞ガと ケレド類の機能についての調査

—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として—

(『都大論究』47号)  
2010年6月)

宮内 佐夜香

## 1 はじめに

接続助詞ガとケレドモ・ケレド・ケド・ケドモ等、ケレドモを元とした一連の形態(以下、ケレド類と呼ぶ)は、現代語における接続表現の意味論的な言及において、同じ機能を持つものとして扱われる。例えば、逆接を表す類義表現について論じた前田(1995)では「ケレドモとガはここでは完全に置き換え可能な形式であると考え、以下ではケレドモを代表として扱う」(前田1995; p. 496)のように記述される。<sup>(1)</sup>このように機能上同一のものとされるガ・ケレド類は、逆接確定条件表現の代表的形式であるが、それ以外の機能も持っている。先行研究において様々な記述がなされているが、大きく分けて逆接とそれ以外の「単なる接続」等と呼ばれる機能に分けられるものと思われる。このいわゆる「単なる接続」に類する機能に関して「背景用法」と呼んで論じた丹羽(1999)においても、「[が]と「けれども」「けれど」「けど」の四者の間には、文体上の差はあっても、背景用法においては意味・用法上特に差がないので、「が」で代表する」(丹羽1999; p. 715)と述べられている。

しかしながら、通時的にこれら二種の接続助詞の成立をさかのぼるとその成立事情は全く異なっている。ガは格助詞ガから派生したもので、石垣(1944)によれば接続助詞の確例は平安初期の物語群には見られず、『今昔物語』に至って発見されるという。その用例の一つとして、(1)が挙げられている。

(1) 落入ケル時已ノ時許ナリケルガ、日も漸ク暮ヌ (巻十六) (石垣1944)

これには、前件と後件の間に逆接的な関係は見出せず、「単なる接続」であると言える。こうした用例は前件と後件の主体が同一であり、同格の格助詞ガの機能を引き継いだものと考えられるが、石垣(1944)によると、以降前件と後件の主体の異なる用例が現れ始め、前件と後件の関連性の低い接続の用例が増加する。そして鎌倉時代に至って初めて前件と後件の関連性が最も低い(内容が矛盾する)逆接的な関係を示す用例が現れる。つまり、接続助詞ガは成立過程の段階に応じて、様々な接続に用いられるようになったものであり、その成立の最終段階に至るまで逆接的な関係を明確に示す機能は持たなかったことになる。

一方で、ケレド類は、已然形に接続して用いられる逆接確定条件表現のドモが、中世以降新たに発生した助動詞「マジイ」「マイ」において「マジイケレドモ」「マイケレドモ」などの形で使われ、これらが不変化の助動詞として意識されて「マジイ+ケレドモ」「マイ+ケレドモ」という異分析が起こったことにより成立したと推定される<sup>(3)</sup>。このケレド類の元となったドモは、現代語のケドが持ち接続助詞ガが発生時から持っていたような「単なる接続」の機能を持たない。また、宮内（2007）では、現代共通語の源流とも言える近世後期江戸語において、ケレド類が逆接的な機能のみで用いられていることが確認されている。もともとはガとケレド類は機能上異なる性質であったことになる。現代語のケレド類は明らかに逆接以外の機能を持っていることから、ケレド類には近世以降に変化が起り、逆接以外の接続の機能を獲得したものと考えられる。

ただし、現代語のガ・ケレド類の機能については、その記述の目的や観点の違いによって、様々な記述がなされており、時代を遡った用例に対して現代語と同様の分析が行われない限り、厳密にはどのような質の変化であったのかを論ずることはできない。そこで本稿では、通時的変化を記述することに重点をおいた宮内（2007）で行った機能分類を、現代語のガ・ケレド類に対しても適用し、同様の観点による現代語のガとケレド類の機能分析を試みる。ガとケレド類をそれぞれ分析することによって二形式の共通性の実態や差異を明らかにすることができる。同時に、近世後期江戸語・明治期東京語と現代語との差異について同様の観点で比較・考察することが可能となり、現代共通語の通時的な背景について明らかにすることにつながるものと考えられる。そのために本稿では、まず、現代語のガ・ケレド類のそれぞれの機能について分析を行いたい。

## 2 調査について

### 2.1 調査資料の概要

調査資料として、国立国語研究所を中心に現在構築中の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese 以下、BCCWJと略す<sup>(4)</sup>）を用いる。BCCWJは、行政白書・新聞・書籍・Webデータ・雑誌・教科書・議事録等、現代日本語の様々な書き言葉のジャンル・媒体（以下ジャンル）が収録され、完成時には約1億語の収録を目指す形態論情報付き大規模コーパスである。収録データについては、統計学的手法に基づくサンプリングにより、日本語書き言葉の多様な実態が反映するように選定されている。特定の小説作品全体の調査等、限定的な資料を用いた調査と比較して、より一般性のある傾向を得ることができるものと考えられる。本稿ではこうしたBCCWJの特質を踏まえて、現代語のガとケレド類について一般的な傾向を把握したい。

### 2.2 調査対象データについて

BCCWJの形態論情報では短単位・長単位と呼ばれる二種の言語単位が設計され、各言語単位に品詞や語種等の情報が付与される。一部のデータに対しては人手による修正が施され、より高い精度の形態論情報が付与されている。本稿ではこの人手修正済み短単位解析データ（以下、人

手修正データ)の品詞情報を利用して、接続助詞ガ・ケレド類の用例の機械的抽出を行った。調査の内容は(2)のとおりである。

## (2) 調査内容

### ■調査対象形式の抽出条件

短単位の品詞情報が[接続助詞]と判別されているガとケレド(異形態ケドを含む)

### ■調査資料の詳細→表1

表1：調査資料情報

ジャンル	語(短単位)数	出版年等	著者生年代	カテゴリー等<()内はサンプル数>
行政白書	約20万語	2001-2005	—	教育(2)外交(6)国土交通(7)農林水産(8)安全(13)科学技術(5)経済(9)環境(4)福祉(8)
新聞	約20万語	2001-2005	—	全国紙(223)<内訳:朝日(59)毎日(51)読売(60)産経(53)>ブロック紙(145)<内訳:北海道(47)中日(51)西日本(47)>
雑誌	約20万語	2001-2005	—	1 総合(61) 2 教育・学芸(7) 3 政治・経済・商業(7) 5 工業(6) 4 産業(1) 6 厚生・医療(2) ※『雑誌新聞総かたろぐ』(メディアリサーチ)による分類
書籍<文学以外>	約15万語	2001-2005	1875-1974	0 総記(6) 1 哲学(6) 2 歴史(6) 3 社会科学(18) 4 自然科学(6) 5 技術(8) 6 産業(6) 7 芸術(4) 8 言語(2) NDC なし(4) うち翻訳(4) ※日本十進分類法(NDC)による分類
書籍<文学>	約15万語	2001-2005	1889-1976	9 文学(17) うち翻訳(3) ※NDCによる分類
Web データ (知恵袋)	約10万語	2004-2005	—	web 質問掲示板「Yahoo!知恵袋」(938)<内訳:エンターテインメントと趣味(115)インターネット、PCと家電(93)ビジネス、経済とお金(41)職業とキャリア(30)ニュース、政治、国際情勢(37)スポーツ、アウトドア、車(72)暮らしと生活ガイド(88)健康、美容とファッション(148)子育てと学校(51)マナー、冠婚葬祭(25)教養と学問、サイエンス(72)地域、旅行、お出かけ(30)Yahoo!JAPAN(112)その他(24)>

表1に示したデータから、接続助詞ガとケレド類を抽出すると、ガ:3744例、ケレド類:575例という数値となった。今回は目視による機能分類という方法をとるため、このすべての用例を対象として調査するのは困難である。そこで、ガについては、人手修正データから小規模なデータセットを抽出し、その中の用例について全数調査を行うこととした。

データの抽出は、機械的なランダムサンプリングによって行った。人手修正データの文数は全体で64906文である。便宜的な指標として、ケレド類と同数程度(575例)の用例を調査することを想定し、ガとケレド類の全用例数の比率が概ね6:1であることから概算して、64906文の約1/6になる10800文を抽出した(以下、このデータセットを縮小版と呼ぶ)。その結果、縮小版

のガの用例数は595例となった。指標どおりの用例数が得られたと言える。

この10800文が人手修正データの縮小版として妥当であるかの確認のために、各データセット内に含まれる接続助詞の比率を算出した。表2は人手修正データ全文中に現れる接続助詞の各形式用例数と接続助詞の全用例数を100とした使用比率を示したもの、表3は縮小版に現れる接続助詞について同様の数値を示したものである。

この2種の表を比較すると、接続助詞の出現比率は、人手修正データ全体と縮小版で、非常によく似た数値となっている。ひとまず接続助詞の使用に限ってはほぼ合致するものとして、今回はこの縮小版を用いることとする。

表2：人手修正データ 接続助詞用例数

形式	から	ので	し	なら	たら	ば	と	とも	が	けれど	ものの	つつ	ながら	計
用例数	1494	915	485	615	908	2039	2293	72	3744	575	117	192	691	14140
使用比率	10.6%	6.5%	3.4%	4.3%	6.4%	14.4%	16.2%	0.5%	26.5%	4.1%	0.8%	1.4%	4.9%	100%

表3：縮小版 接続助詞用例数

形式	から	ので	し	なら	たら	ば	と	とも	が	けれど	ものの	つつ	ながら	計
用例数	243	151	69	88	142	340	419	8	595	99	28	29	94	2305
使用比率	10.5%	6.6%	3.0%	3.8%	6.2%	14.8%	18.2%	0.3%	25.8%	4.3%	1.2%	1.3%	4.1%	100%

今回は現状存在する人手修正データ全体を対象にして機械的抽出を行った。その結果、抽出された用例の中に翻訳された書籍サンプルのものがガに1例あった。これを無効なデータとして用例から除いた。また、書籍は出版年を基準に収録されているため、作品の成立年との大きく差のあるサンプルもある。これを除くために、今回は作者の生年が1900年以前であるサンプルからの用例は無効とすることとした。無効となった用例はガが5例、ケレド類が14例である。また、誤解析がガに2例見られたため、これも無効とする。その結果、今回分析対象とする用例はガ：587例、ケレド類：561例となった。

### 3 機能分類

#### 3.1 先行研究の記述

1において、現代語のガとケレド類は複数の機能を担っており、逆接確定条件表現及びいわゆる「単なる接続」の機能を持っていることを述べた。それらのうち、特に「単なる接続」の機能について、先行研究においてどのように記述されているのかを確認する。

当時の助詞・助動詞の用法について、書き言葉の実例を元に詳細に記述した国立国語研究所(以下国語研究所)(1951)では「が」の項に(3)のような用法が記述されている<sup>(6)</sup>。

(3) 国語研究所(1951; p.19-25) が 接続助詞 より抜粋

①二つの事がらをならべあげる際の、つなぎの役目をする。共存または時間的推移。

○それは、美濃大井町の知人をたづねるのが目的であったが、その途中で、上諏訪に、

一泊するといふことが由比の、ひそかな、たのしい、目あての一つであった。

○男は驚いて、顔を退いたが、「馬鹿！ 見損なったらいけない」ぴしゃりと娘の片頬を打った。

②題目・場面などをもち出し、その題目についての、またはその場合における事がらの叙述に接続する。そのほか、種々の前おきを表現するに用いる。

○チューダー王政は当時のヨーロッパの王政のいずれにも劣らず過酷で専制的であったが、それは同意による絶対主義という奇妙な光景を呈していた。

③補充的説明の添加。

○～吹雪や風塵～これは関東地方で春のはじめによく起るものであるが～も電荷をもつ微粒子が運動するものだから～

④内容の衝突する事がらを対比的に結びつけ、前件に拘束されずに後件が存在することを表す。(既定の逆説条件。)

○早めし早何とかという教えの下に育ったわたくしであるが、できるだけゆっくりと噛みしめる。

次に、「けれども(けれど・けど・けども)」の項には(4)のような用法が記述されている(用例は省略する)。

(4) 国語研究所(1951; p.43-48) けれども(けれど・けど・けども) 接続助詞 より抜粋

①二つの事がらをならべあげる際のつなぎ。共存の場合。また、単なる時間的推移を表わすこともある。

②次に来る叙述の場面・題目などを持ち出し、また、前おきを述べて、次の叙述に続けるつなぎとする。

③内容の衝突する事がらを対比的に結びつけ、前件に拘束されずに後件が存在することを表す。(既定の逆説条件。)

④補充的挿入を表す。

このように、両形式について複数の用法が記述されていることが分かる。二つの用法記述を比較すると、ほぼ同じ用法が記述されている。このうち、「が」の④、「けれども」の③が逆接であり、ひとまずそれ以外が「単なる接続」の類と言える。

また、森田(1980)では、ガとケレド類を「ほぼ同じ働きの助詞」としてまとめ、(5)のような用法を記述している。

(5) 森田(1980; p.135-136) より抜粋

(1) 逆接を表す。

(2) 対比を表す。

(3) 二つの事柄を並べ挙げる。並列、累加を表す。

(4) 全く関係ない叙述を繋げる。前置きから次の話題へと話を発展させる。

森田(1980)と国語研究所(1951)の分類との対応は、概ね表4のようになるものと思われる。細部は異なるが、「単なる接続」についてほぼ同様の記述がなされていることが確認される。

次に亀田（1998）では、国語研究所（1951）の「が」の 表4：国語研究所（1951）と森田  
②の記述と、森田（1980）の（4）記述を踏まえて、これ （1980）の用法の対応

国語研（1957）	森田（1980）
「が」①	（3）
「が」②	（4）
「が」④	（1）（2）

を「提題用法」と呼び、その題目の示され方について、詳細な分析を行っている。亀田（1998）はこの「提題用法」に特化してガの用法を論じたもので、国語研究所（1951）や森田が記述する他の用法には触れていないが、結論として「提題用法」のガは「後件である叙述をするための前段階として、ある事態を聞き手に対して導入する」（亀田1998；p.7）という機能を持つと記述し、ガによる接続表現は逆接やその他の用法の場合も、「「が」によって何らかの事態が「提示し導入されている」という点においては共通している」（亀田1998；p.7）と指摘している。国語研究所（1951）や森田（1980）で様々に記述されている機能を、一貫した枠組みで考えるという立場であると考えられる。

丹羽（1999）においても、ガの接続の機能が一貫した枠組みで記述されている。丹羽（1999）では、「昨日のことだが、ちょっとした地震があった」という用例を、従来「前置き」「単なる接続」のように呼ばれる用法の用例として示し、こうした用法を「背景用法」と呼んで考察している。先行する丹羽（1998）では、逆接のガについて「Pが成立し、それと肯定否定の関係で対立するQが並列される」と定義している。これを受けて、丹羽（1999）はガの用法を「対立」を表すものとして一律の定義を行うことを目的としており、（6）のように定義付けている。

（6）丹羽（1999；p.727）より引用 「が」の用法

逆接用法——肯定と否定という対立関係をなすPとQを並列する。

対比用法——対比という対立関係をなすPとQを並列する。

背景用法——背景と前景という対立関係をなすPとQを並列する。

以上のように、各種先行研究でそのガとケレド類の機能がそれぞれの目的に応じて論じられているが、近年の研究においてその機能は連続的であることが指摘されていることが分かる。

### 3.2 逆接的関係の有無に着目した分類

3.1で確認したように、現代語を対象とした先行研究では、現代語のガ・ケレド類は多様な接続を担っていることと、その接続の機能はある共通の性質をもっていることが指摘されている。しかし、本稿では、元来ケレド類は逆接以外の機能は持たなかったという事実を背景として、現代語のガ・ケレド類の機能を調査することを目的としており、その場合、着目すべきはその共通性ではなく、その差異にある。各機能の連続性を否定するものではないが、本稿の目的としては、丹羽（1999）の分類に従えば「逆接用法」「対比用法」と「背景用法」との差異にあたる部分に着目すべきということになる。そこで、本稿ではその差異に基づいてガとケレド類の性質をみるために、あえて各用例の機能に線を引き、分類することを試みる。

丹羽（1999）は（6）のガの3用法に基づく用例解釈において（7）のように述べている。

（7）丹羽（1999；p.727）（用例番号は引用元ママ）

肯定と否定という関係と背景と前景と言う関係は異質なものである。だから、両者の対立が重なりあうことも可能である。《中略》

(64) この前、山田の所に行ったんですが、春子が来ていましたよ。

(65) この前、山田の所に行ったんですが、春子は来ていませんでしたよ。

これはともに背景を表すものであるが、(65)は逆接をも表している（「山田の所に行ったからには春子が来ていることを予想あるいは期待したが、春子は来ていなかった」という関係）。《中略》背景の「が」において、PとQの間に逆接関係を見出すか否かは解釈によるということもある。

この指摘のように接続表現について前件と後件の関係をもとに機能を考えるにあたっては、解釈の問題が大きく関わる。こうした先行研究における指摘を踏まえながら、以下宮内（2007）において行った機能分類について述べる。

宮内（2007）では「逆接」「注釈・断り」「提示」という三分類を設定して用例の分類を行った。この分類の基準は前件と後件に逆接的關係（丹羽（1999）の「肯定と否定という対立関係」）が見いだせるか否か、という点にある。（8）に宮内（2007）に示した分類基準を引用する。

（8）宮内（2007；p.9-10）より抜粋（用例番号は引用元ママ）

#### ○逆接

(20) さやうさ。先刻から<sup>さつき</sup>傍で<sup>そば</sup>口を出したかつたが、<sup>けんくわ</sup>喧嘩になつては悪いと、<sup>めなが</sup>目を長くして居ました（〔滑〕浮世風呂・前下）

これは前件から予測される事態と後件が矛盾する、または前件と後件の内容が対比的であるというものである。《中略》(20)は、「口を出したかつた」なら「そのまま口を出す」ことが推論されるが、「目を長くしていた」つまり「我慢して口を出さなかった」というように解釈され、前件から推論される事態と後件が矛盾するということになる。

#### ○注釈・断り

(24) おまへがたの前でいふは悪いが、<sup>ぜんてへとも</sup>全体友がわる悪いからさ。折角内に仕事をして<sup>ゐるもの</sup>居る者をば、<sup>つりだし</sup>釣出しに来てなりません（〔滑〕浮世風呂・前下）

これは前件内容が後件の発話という行動の注釈や断りとなっているものである。《中略》(24)は、息子の友人の前で、息子に関する愚痴を言う母の発話である。前件で「言うは悪い」と認めながら、後件で悪い内容の発言をしており、「謝っておきながら悪口を言う」というような発言内容と行動の矛盾がみられる。後件を発話するという行動が、前件の発話内容と対立するという点で、逆接に近い機能であると考えられる。

#### ○提示

(26) ハイ、私にも<sup>あぐすり</sup>合ひ薬でござりますが、<sup>ちやう</sup>てりふり町の足袋やで<sup>う</sup>売る、<sup>ちのち</sup>血の道の薬が<sup>よく</sup>能うござります（〔滑〕浮世風呂・二上）

これは前件に何らかの話題を示し、後件にそれについての説明やそれに関係する事柄を述べるものである。《中略》(26)は、「私に合う薬だ」と前件で述べ、後件で「その薬は『足袋や』で売っている『血の道の薬』で…」とその薬について説明をしているというこ

とになる。前件と後件に矛盾はみられず、逆接的意味はないと判断される。

以上の分類と、先行研究の記述の関連について見てみよう。まず、(7)の丹羽(1999)の指摘における「両者の関係が重なりあう」事例の場合、逆接的關係が見いだせるのだから、宮内(2007)では「逆接」として解釈される。また、(4)の国語研究所(1951)の逆接ではない用例を見てみよう。「①二つの事がらをならべあげる際の、つなぎの役目をする。共存または時間的推移。」に挙げられた用例に(9)がある。

(9) 男は驚いて、顔を退いたが、「馬鹿！ 見損なったらいけない」ぴしゃりと娘の片頬を打った。(国語研1951; p.19)

この前後の文脈は不明だが、「驚いて、顔を退いた」、つまり怯んだかのような事柄が前件で述べられているのに対し、後件では「娘の片頬を打」つという攻撃的な事柄が述べられている。「怯んだならば攻撃はしないと予測されるが、攻撃した」という関係と解釈され、この前件後件には逆接的な関係が見出せる。「時間的推移」に従って、前件と後件が述べられていると同時に、そこに逆接的關係も述べられているということになる。この場合も「逆接」として分類する。

宮内(2007)で「逆接」としたものは、国語研究所(1951)「が」④「既定の逆接条件」や丹羽(1999)「逆接用法」などに当たるものの他、国語研究所(1951)「が」①②③や丹羽(1999)「背景用法」のうち、逆接的關係も同時に表現しているものも含むことになる。同時に「提示」は国語研究所(1951)「が」①②③や丹羽(1999)「背景用法」のうち、逆接的關係を表現するものを除外したものに当たることになる。「注釈・断り」については、先行研究にこれにあたる記述や用例が挙げられておらず、どのように分類されてきたのかは定かではない。

連続性のある用法間にどのように線を引くかという問題は大きいが、宮内(2007)における分類は、各用例の文脈を考慮して目視調査を行い、逆接的な関係が見いだされたら「逆接」または「注釈・断り」、そうでなければ「提示」、のように行った。本稿において BCCWJ から抽出した用例についても、同様の方針で分類する。

以下、今回 BCCWJ から抽出した「逆接」「注釈・断り」「提示」の典型的な用例を示し、分類の際の用例解釈を述べる。

#### ■逆接

(10) 堺利彦なんてとっても味がある。文章もうまいし、人間の器量もあつたんだけども、評価されないで昭和を戦後まで来ちゃうでしょう(書籍<文学以外>『未来におきたいものは 鶴見俊輔対談集』)

(11) どっちかが家にどうしてもいなくちゃならないっていうんだもの。土日なら私はいるんだけど、今日じゃなきゃだめだって(書籍<文学>『人生ベストテン』)

(12) 私なら「何にしていかが迷ってしまって・・記念になる物にしたかったけどもう揃ってるだろうから」って五千円ギフト券くれるとうれしいね。(知恵袋・マナー、冠婚葬祭)

例えば(10)は、「文章がうまくて人間の器量があるなら評価されるべきだが評価されなかった」という明確な逆接関係が前件と後件に認められることになる。

#### ■注釈・断り



(13) 大量失点しているのは、言っちゃ失礼だけど二線級の投手たちで、先発はそんなに試合を壊してはいません。(知恵袋・スポーツ、アウトドア、車)

(14) 次元が低いとは言わないけどさ、いきなり痴話喧嘩みたいな話になっちゃって(書籍<文学>『はちまん』)

(15) よくわかりませんが、どうもウイルスソフト(Norton・・)のメールスキャンの関係者だと思います。(知恵袋・インターネット、PCと家電)

「注釈・断り」と判定される用例は、他の分類よりも範囲が限られる。(13)は「言うのは失礼だと言いながら、失礼な内容を発言する」、(14)は「次元が低いと言わないと言いながら、次元が低いという評価に近い内容を発言する」、(15)は「分からないことだと言いながらその内容を発言する」のように解釈され、前件の発言内容が、後件を発言するという行為そのものと矛盾しているということになる。この分類は、ある程度前件に現れる表現が限定される。(13)(14)(15)に挙げたような「失礼だが」「分からないが(知らないが)」の他、「申し訳ないが」などの謝罪の表現等が来る場合、一律この分類に収める。しかし(16)のような用例の場合、「分かりませんが」となっているが、「決まりはAだが、自分の家ではBである」のように前件と後件を対比させた内容と解釈され、逆接に分類される。文脈によっては前件の表現が定型的であっても必ずしも「注釈・断り」の用例とは判定されないことになる。

(16) 決まりがあるのかどうか分かりませんが、私の実家では8分目までは入れていますよ。

(知恵袋・マナー、冠婚葬祭)

ただし、今回の分類の重要な基準である逆接的か否かという点では、「逆接」に分類されても「注釈・断り」に分類されても逆接的ということになるため、ある程度の解釈の揺れは許容する立場をとる。

以上の「逆接」と「注釈・断り」は、前件と後件の関係に違いは認められるが、ともに逆接的な関係を示しているという点を重視し、以下まとめて「逆接」として扱う。

#### ■提示

(17) 実際、私への相談は次のような内容が代表的です。“これこれの症状だけど何科にかかればよいのか？”(書籍<文学以外>『プライベートドクターを持つということ』)

(18) そうです。枝分かれとおっしゃいましたけれども、力がお互いに及ぼし合うことで成り立つ細部がある。その枝分かれの総体が神だし、神の意識のうちにある。(書籍<文学以外>『未来におきたいものは 鶴見俊輔対談集』)

(19) 『直球ばかりじゃなく変化球も覚えないと』なんて言われるんだけど、ムカーツときますね。(新聞・北海道新聞)

(20) 真面目に答えますが、普通のオークション画像です。(知恵袋・Yahoo! JAPAN)

例えば(18)ならば「枝分かれ」という話題が提示され、後件にその「枝分かれ」について、さらに詳細が述べられているものと解釈される(「枝分かれしたそれぞれが影響し合う」という文脈と解釈)。この場合、前後の文脈から後件の内容が「枝分かれ」についての補足説明であると解釈し「提示」に分類した。また、(20)は、後件を発言する行為について「真面目に答える」

ものと予告しており、前件と後件の関係でいえば、「悪いことを言うが」などの、「注釈・断り」と同じ構造をしていると思われる。前件と後件の関係の構造、という観点では、異なる分類がなされるべきであり、別途分析すべき点であると考えが、この場合、「真面目に答える」と提示して後件でその「真面目な答え」の内容が述べられていることから、逆接的關係は認められない。こうした用例も「提示」とする。

以上のように、前接の動詞にも着目するなど、なるべく齊一な分類を試みたものである。

3.3では、分類結果を数値に示して、その様相を分析する。

### 3.3 ガ・ケレド類の機能比率

人手修正データ及びその縮小版から抽出したガとケレド類の用例を、3.2に示した方針で分類し、その数値と比率をジャンル別に示したのが表5である。ケレド類は、その全体の数値と、ケドとケレド(モ)の形態別<sup>(7)</sup>の数値も示した。BCCWJの形態論情報では文頭の「だけど」「ですが」などの形の使用(表5の「接続詞」)でも後件の省略された文末における使用(表5の「文末」)でも、活用語の終止形に接続して用いられるものは、接続助詞と解析される<sup>(8)</sup>。また逆接仮定条件

表5：ガ・ケレド類の機能別用例数

#### ○ガ

ジャンル	逆接	提示	計	接続詞	文末
行政白書	27 69%	12 31%	39 100%		
新聞	129 89%	16 11%	145 100%	6	2
雑誌	72 78%	20 22%	92 100%	5	5
書籍 <文学以外>	53 72%	21 28%	74 100%	1	4
書籍 <文学>	53 82%	12 18%	65 100%	5	5
知恵袋	59 48%	65 52%	124 100%	14	
計	393 73%	146 27%	539 100%	31	16

#### ○ケレド類

ジャンル	逆接	提示	計	接続詞	文末
行政白書	1 100%	0 0%	1 100%	0	0
新聞	27 87%	4 13%	31 100%	2	2
雑誌	106 87%	16 13%	122 100%	2	33
書籍 <文学以外>	31 79%	8 21%	39 100%	5	12
書籍 <文学>	87 84%	17 16%	104 100%	13	53
知恵袋	69 75%	23 25%	92 100%	0	55
計	321 83%	68 17%	389 100%	22	155

#### ○ケド

ジャンル		提示	計	接続詞	文末
行政白書	0	0	0		
新聞	17 81%	4 19%	21 100%	2	2
雑誌	75 87%	11 13%	86 100%	2	31
書籍 <文学以外>	12 80%	3 20%	15 100%	4	5
書籍 <文学>	46 77%	14 23%	60 100%	13	38
知恵袋	66 74%	23 26%	89 100%		53
計	216 80%	55 20%	271 100%	21	129

#### ○ケレド(モ)

ジャンル	逆接	提示	計	接続詞	文末
行政白書	1 100%	0 0%	1 100%		
新聞	10 100%	0 0%	10 100%		
雑誌	31 86%	5 14%	36 100%		2
書籍 <文学以外>	19 79%	5 21%	24 100%	1	7
書籍 <文学>	41 93%	3 7%	44 100%		15
知恵袋	3 100%	0 0%	3 100%		2
計	105 89%	13 11%	118 100%	1	26

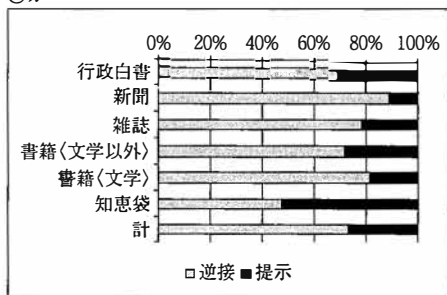
の例も含まれる（表に記載せず。2例出現）。本稿では抽出した用例から、それらの用例を除外して「逆接」（「逆接」・「注釈・断り」）「提示」の分類を行った。その3分類のジャンルごとの比率をグラフ化したものが、図1である。

全体で見ると、まず、ガもケレド類も「逆接」「提示」両方に用いられていることが分かる。数値では、ガの「提示」が27%でケレド類の「提示」が17%と、ガの方が提示に用いられる率が10%高くなっている。

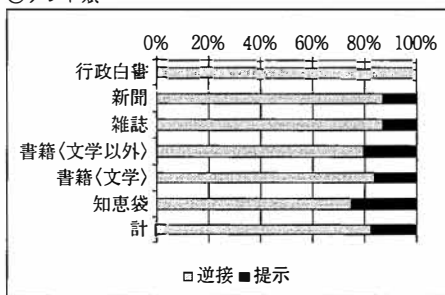
ガとケレド類の「提示」の数値の差について、ジャンル別に傾向を見ていこう。

「提示」は新聞のガで11%、ケレド類で13%、書籍〈文学〉のガで18%、ケレド類で16%である。この二つのジャンルにおいてはガとケレド類が同程度の比率で「提示」に用いられている。このようにガとケレド類はジャンルによっては同様の傾向を持っていることが分かる。雑誌と書籍〈文学以外〉では、ガとケレド類との「提示」の比率の差は全体の傾向と類似する。各ジャンルに収録されたデータの特徴を考慮すると、行政白書・知恵袋以外は、その媒体による分類となっており、新聞であれば、事件等の記事、社説、コラム、インタビュー、連作小説等も含まれている。雑誌は、週刊誌、ファッション誌、各種専門誌、小説誌等すべてが含まれており、書籍も書籍〈文学以外〉にはNDC9類以外のすべての類が含まれる。書籍〈文学〉であっても、今回小説類における会話文と地の文を区別せずに集計している。これらのジャンルには様々な文体

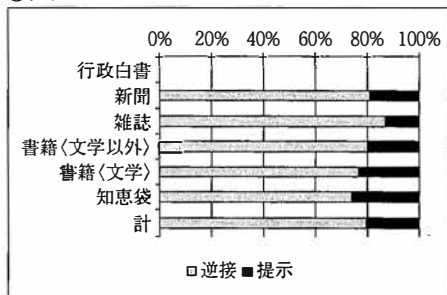
○ガ



○ケレド類



○ケド



○ケレド(モ)

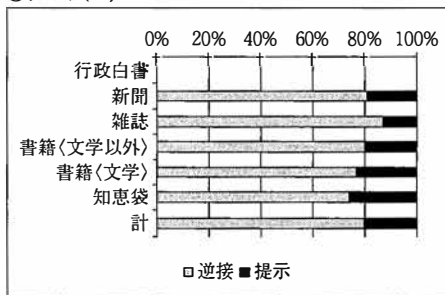


図1：ガ・ケレド類 「逆接」「注釈・断り」「提示」比率

が混在しており、こうしたことから、新聞、雑誌、書籍における傾向は、文体に拠らない総合的な傾向と考えてよいものと思われる。

特異な数値が現れているのは行政白書と知恵袋である。この2種は他のジャンルと比較してデータ内の文体が一貫しているジャンルである。

行政白書はケレド類がほぼ用いられず引用文内の1例のみとなる。行政白書は「ガとケレド類の機能の差異を考える」という目的においては対象外としても良いジャンルであると言える。

知恵袋では、ガが52%と半数以上提示で用いられており、ケレド類の25%と2倍程度の差がある。知恵袋は質問掲示板であり、質問者は不特定多数のユーザーから必要な回答を得るために、丁寧な態度を示す傾向がある。また、BCCWJにおいては(21)のように質問の全文と回答の中から質問者が一つだけ選ぶ「ベストアンサー」のセットが1サンプルとして収録されている。

(21) 知恵袋のサンプル例・ビジネス、経済とお金

〔質問〕 JNB→郵便局口座への振込み手数料はいくらでしたっけ???

〔回答〕 ジャパンネットバンクの「郵貯Web送金」のことですね?

振込手数料は294円です。

この「ベストアンサー」である回答も質問者に選ばれている以上、丁寧なものが多い傾向がある。以上のような理由から、知恵袋の文章では「です・ます」体が多くを占めている。これに関連して、ガとケレド類には、「です・ます」と「だ・である」などに関わる文体的差異があり、BCCWJにおける「です・ます」体と接続助詞の関連についての宮内(2009)の調査では、知恵袋のガはほぼ100%が「です・ます」に接続して用いられ、ケレド類は「だ・である」の方が多数であることが分かっている。今回知恵袋の「提示」においてガとケレド類の数値に大きな差が出たことは、知恵袋の丁寧形式の多用との関連がある可能性がある。文体に関連する差異を考慮した考察を行う必要がある。

以上から、ジャンルによって傾向は異なるが、ケレド類は「提示」に用いられることが確認され、ジャンルによってはガと同程度の比率で「提示」に用いられていることが分かる。

次に、ケレド類をケドとケレド(モ)に分けた数値を確認する。ケドであっても、ケレド(モ)であっても、「提示」の用例は現れており、その点では差異は見られない。しかし出現比率を比較すると、「提示」はケドが20%に対して、ケレド(モ)が11%であり、その機能の表れ方に差が出ている。この結果から、ガとケドと機能の表れ方の差に比べて、ガとケレド(モ)の機能の表れ方の差のほうが大きいということが分かる。ケレド類の形態別に機能をみると、ガとケレド(モ)の間に差異が認められ、ケレドはより「逆接」に用いられやすい傾向があることが明らかになったものと思われる。

#### 4 おわりに

本稿では、ケレド類がもともと逆接以外の機能を持たなかったということを背景として、現代語の接続助詞ガ・ケレド類の機能について調査した。「逆接」(「逆接」・「注釈・断り」)と逆接

的ではない「提示」という分類を設定し、用例の分類を行った結果、ガとケレド類（ケレドモ・ケレド・ケド等の一連の形態）はともに「逆接」「提示」の両方で用いられていた。先行研究で指摘されているように同様の機能を持っていることが、現代語の実例の分析において認められたことになる。宮内（2007）では近世後期のケレド類は「提示」に用いられていないことを指摘している。今回それと同様の観点で分析した結果、現代語のケレド類は近世後期には持っていなかった「提示」の機能を持っていることが明らかになった。ケレド類に近世後期以降に機能変化が起こったということが改めて確認されたものと考ええる。

しかし、ケレド類を形態別に分けてその機能の表れ方を分析した結果、数値の上では縮約形のケドに比べて、ケレド（モ）の方が逆接的關係を表す比率が高いという傾向が得られた。今後用例収集の範囲を広げて現代語のケレド（モ）の用例を分析するなど、さらに検証する必要があるが、ここにケレド類とガの差異が見出されたものと考えられる。また、より規範的なケレド（モ）の方が逆接的關係を表しやすく、縮約形であるケドの方が歴史的に新機能といえる「提示」に用いられやすいという傾向は、形態変化と機能変化の影響關係が示唆されるものである。今後その変化の時期が重なるか否かなどに注意して、歴史的な変化の調査・考察を行いたい。

今回現代語のガ・ケレド類の用例を、宮内（2007）で行った江戸語・明治期東京語に対する分析と同様の観点で分析したことで、通時的考察をする際の比較対象としての現代語の様相を、内省とは異なる客観的なデータとして示すことができた。これらの詳細な比較については、別稿を期す。他、本文中記した多くの課題についても、今後分析を進めていきたい。

## 注

- (1) 他、逆接のガ・ケレド類について論じたものの中で「ケレドモ、ケド、ガ（以下本稿ではケド類）」（渡部1995；p.557）、「なお、ケレド（モ）という形はガとはほぼ同じ機能をもつものと考える」（野田1995；p.565）等、断り書きされる例が多数ある。
- (2) 国立国語研究所（1951）、森田（1980）、亀田（1998）、丹羽（1999）
- (3) 西田（1978）、村田（1996）、小林（2005）
- (4) 山崎（2007）、前川（2008）
- (5) 短単位は「国語 | 研究 | 所 | に | よっ | て」と語を短く切り、長単位は「国語研究所 | に よって」のように、複合名詞や複合辞を一つの単位とみなすものである。形態論情報の詳細は小椋ほか（2010）参照。
- (6) この他、「⑤推量の助動詞について、その事がらに拘束されない結果を導く条件を表わす。（仮定の逆説条件。）」という用法が記述されているが、本稿では確定条件の類を扱うため、言及しない。
- (7) ケレドモは、数も少なくケレドとしてまとめた場合と大きく傾向に差がないため、ケレドの数値に含む。内訳は、逆接：25、注釈・断り：1、提示：5、文末：3、計34例。
- (8) 単独の文頭での使用は接続詞と解析される。
- (9) 今回利用したデータベース上は会話文と地の文を区別するような情報付与は行われておら

ず、別途操作が必要となる。今回は全体の傾向の把握という目的で、既存のデータベースのみを用いた。会話文を区別した分析は、今後の課題とする。

#### 参考文献一覧

- 石垣謙二 (1944)「主格「が」助詞より接続「が」助詞へ(上)(下)」『国語と国文学』21巻3・5号(石垣謙二(1955)『助詞の歴史的研究』岩波書店 所収)
- 小椋秀樹・小磯花絵・富士池優美・宮内佐夜香・原裕 (2010)『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集第3版』国立国語研究所内部報告書
- 亀田千里 (1998)「接続助詞「が」の提題用法について」『日本語と日本文学』26(筑波大学)
- 小林賢次 (2005)「条件表現史にみる文法化の過程」『日本語の研究』1巻3号
- 国立国語研究所 (1951)『現代語の助詞・助動詞 用法と実例』秀英出版
- 西田純子 (1978)「「けれども」考—その発生から確立まで—」『東京成徳短期大学紀要』11
- 丹羽哲也 (1998)「逆接を表す接続助詞の諸相」『人文研究 国語国文学』50
- 丹羽哲也 (1999)「対立的な並列を表す接続助詞「が」」『大阪市立大学文学部創立五十周年記念 国語国文学論集』和泉書院
- 野田春美 (1995)「ガとノダガー前置きの表現—」『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版
- 前川喜久雄 (2008)「KOTONOA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の開発」『日本語の研究』4巻1号
- 前田直子 (1995)「ケレドモ・ガとノニとテモ—逆接を表す接続形式—」『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版
- 宮内佐夜香 (2007)「江戸語・明治期東京語における接続助詞ケレド類の特徴と変化——ガと対比して——」『日本語の研究』3巻4号
- 宮内佐夜香・小木曾智信・小椋秀樹・小磯花絵 (2009)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に現れる接続表現形式のジャンル別比較」『二〇〇九年度春季大会予稿集』日本語学会
- 宮内佐夜香 (2009)「丁寧体文内における従属句の文体と接続助詞について—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として—」『二〇〇九年度秋季大会予稿集』日本語学会
- 村田菜穂子 (1996)「「ケレドモ」の成立—「閉じた表現」への推移と不変化助動詞「マイ」成立との有機的連関を見据えて」『国語語彙史の研究』16
- 森田良行 (1980)『基礎日本語2——意味と使い方』角川書店
- 山崎誠 (2007)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の基本設計について」『特定領域「日本語コーパス」平成18年度公開ワークショップ(研究成果報告会)予稿集』
- 渡部学 (1995)「ケド類とノニ—逆接の接続助詞—」『日本語類語表現の文法(下)』くろしお出版

## 付記

本稿は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所コーパス開発センターによる成果の一部を利用したものです。

(みやうち・さやか 国立国語研究所 プロジェクト特別研究員)